

The 40th Anniversary

開講40周年記念誌

2007年11月

謹呈

末元修三

岡山大学医学部内科学第三講座・同門会

「国際精神神経内分泌学会 (ISPNE, 京都, 1985)」での
 出会いから「国際内分泌学会(ICE, 京都, 1988)」へ

～ Mary F. Dallman教授, 橋本浩三先生と私の思い出～

昭和51年入局 末丸修三

医療法人絃友会 福山友愛病院

私は、当時、講師の橋本浩三先生（現高知大学医学部長、内分泌代謝・腎臓内科学講座教授）が率いられていた「内分泌グループ」（景山、大野、村上、服部、菅原、井上、高尾、牧野、平沢、小笠の諸先生らがメンバー）に所属し、橋本先生のご指導のもと、神経内分泌学、とくに“ストレス時における脳内CRF (corticotropin-releasing factor) 分泌機構”に関する研究に取り組んでいた。1985年に京都で開催された「国際精神神経内分泌学会」で“morphine effect on CRF secretion”に関する演題を発表した際、米国のMary F. Dallman教授との出会いがあり、橋本先生のご推挙をいただき、幸運にも、臨床薬理研究振興財団・海外留学等補助金を受賞（当時、岡山大学長の大藤 眞先生のご推薦を賜る）、米国NASAからのGrantも得て、1986-88年の約2年間、カリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）医学部生理学（神経内分泌生理学、Mary F. Dallman教授の研究室）に、Postdoctoral Fellowとして留学することができた。Maryは、glucocorticoid feedback, circadian rhythm, stress etc., CRF-ACTH-glucocorticoid系の領域において世界的に著名な女ボスであった。研究室はほとんど素敵な美人女性研究員で占められ、まさに『女の城』。私はその中へ飛び込み、気に入られた貴重な男系働き蜂のようであった。


私と家族3人がサンフランシスコに滞在していた1987年にゴールデンゲイトブリッジの建設50周年を迎え、華々しい記念祝賀行事が催された。帰国した1988年には、瀬戸大橋が開通し両者は姉妹ブリッジの縁組をした。瀬戸大橋の与島には、サンフランシスコのフィッシャーマンズ・ワーフに似せた瀬戸大橋フィッシャーマンズ・ワーフがオープンした。江戸時代末期1860年に勝 海舟を艦長として品川を出帆し、37日後に初めてサンフランシスコに到着した

昭和63年(1988年)7月28日 木曜日 (22)

クッシング病

視床下部の異常で発病

ラット使い実証
 岡山大の末丸医師が発表



「クッシング病は、視床下部の異常で発病する」と岡山大の末丸修三医師が、ラットを使った実験で実証した。末丸医師は、ラットにクッシング病を誘発させるために、視床下部に電極を挿入し、電流を流した。すると、ラットの血中糖質コルチコイド濃度が上昇し、クッシング病の症状が現れた。末丸医師は、この結果から、クッシング病は視床下部の異常で発病するのではないかと推測している。

写真1：1988年7月28日、
 山陽新聞朝刊の記事

帆船「咸臨丸」，わが日本人によって太平洋を横断した初めての壮挙であり日米親善に役立った「咸臨丸」を模した観光クルーズ船が，ここ瀬戸大橋フィッシャーマンズ・ワーフでは現在もなお運航している。

1988年7月，京都で開催された「第8回国際内分泌学会」に参加するため，私は Mary とともに一時帰国し，UCSF での研究成果の一つを，“Ven-



写真2：「咸臨丸」上の Mary F. Dallman 教授，橋本浩三先生と私（1988年7月）

tromedial hypothalamic lesions: a neural model for Cushing's disease”と題して演題発表した。その発表により共同通信の取材を受けることになり，山陽新聞，中国新聞，産経新聞，朝日新聞（“科学”の欄）等に記事が掲載された（写真1）。サンフランシスコと岡山を結ぶ瀬戸大橋の「咸臨丸」に，Maryと橋本先生と私が乗船した時がたいへん懐かしく思い出される（写真2）。

実験研究というものは，大学の中での研究グループメンバーのお互いが切磋琢磨して，協力し合っこそ，優れた研究成果が得られる，つまり決して個人プレイで成就するものではない。最近，卒後臨床研修制度下，全国的に，研修終了後に大学にもどり研究に情熱を燃やす若者が減少してきていること，外の病院にいてただ専門医をとり経済的にまず豊かであればそれで良いという風潮は，嘆かわしい。大学での診療・研究を通した修行は，医学博士という学位を得るだけがその目的ではなく，グループ研究を通して，the Standardsをわきまえぬ狭視野の危険な我流医術者・算術者に陥らぬように幅広い視野をもち，グループワークの基本姿勢，「チーム医療」に欠かせぬ資質，すなわち“忘己利他”の謙虚さ，協調（協働）性，平等観，創造性豊かな科学的思考力と遂行力に長けた人間性を養う上で極めて重要なのであり，学位というものはそのOutcomeとして自然に付与されるものと考えている。

なお，私は，橋本先生が（当時）高知医科大学第二内科教授にご就任されて以来，先生のご要請により，約16年にわたり，6年次生対象の「臨床医学特論」・「統合医学」の講義を担当し，（現）高知大学医学部非常勤講師を感謝しつつ勤めさせていただいている。

（2007年4月29日記）